

# 赤トトギス

六月号



赤トトギス

明治二十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)  
平成十七年六月一日発行(第百八十八巻第六号)

## 俳句随想

二百七十六

汀子

四月から始まる「NHK俳句」に出演することになった。私はホトトギスから輩出した著名な俳人、またそれほど世に喧伝されていないがホトトギスを支えて来た俳人たちの足跡をたずね、それらの作品を通し或いはその為人に触れ顕彰して行きたいと思う。

私のホトトギスに於てしなげなければならない仕事はそれをする事だと思っていたところにNHKから出演のお話を頂いた。約束の二年間にはとてもホトトギスの現在までを網羅することはできないが、この「俳句随想」の頁で続けられたらと思っている。

ホトトギスは千三百号という百八年を超える誌齡を続けて来た。虚子記念文学館に於て十年間のホトトギスのCDROM化と索引が完成する。写真に撮って収録した内容を見ることが出来る。このようにしてホトトギスと社団法人日本伝統俳句協会と財団法人虚子記念文学館の三本柱を立てて、伝統俳句を顕彰しこれまでホトトギスを支えて来た全ての偉業を私はホトトギスの中ばかりでなく多くの人々に知らせて行かなければならないと思っている。

旬日記

汀子

平成十六年六月一日 ロイヤル俳壇

抱き来し薔薇を供へてより 偲ぶ  
岳麓の 木々 渡る 風 時鳥  
山雨急 風先立てて 夏の 荘  
明易き ことに 一日を 使ひ 切る  
山荘の 微の 月日の はじまり ぬ  
六月五日 芦屋ホトギス会  
岳麓ので でむし 掃きて 荘開く  
散りつぎで 咲きつぐ 未央柳かな  
六月六日 悼 本間無石様  
緑なす 北限の 地よ 惜まるる  
六月六日 関西野分会  
見当らぬ 蠅にも 置かれ 蠅捕器  
魚屋の 蠅 捕り ボン 真新し  
狭庭にも 一画ありて 竹落葉  
降り出して 又止んで 梅雨近きこと  
六月六日 下萌句会  
競べ馬 森の 風音 駆け 抜けし  
麦 秋の 一枚の 風渡り けり  
六月八日 大阪倶楽部  
蛭 蟪に 庭の 春秋 古りし こと  
濡れしまま 活けて 百花の 夏めき ぬ  
活けし 花梅雨に 濡れたる 風情あり  
六月八日 綿業倶楽部  
椎の 花句 へば 近き 山の 荘  
降りさうな 空を 支へて 梅雨 曇  
六月十日 清交社  
岳麓の 荘に 馴染みて 火取虫  
草取の どこから となく いつとなく  
蛭狩旅のはざまを 埋めに けり  
計画 は一泊と なる 蛭狩

湖の 放ちし 火蛾 もあり ぬべし  
上流といふ 蛭の 棲むところ  
六月十一日 工業倶楽部  
日頃なき 近所つぎ あひ 溝 浚へ  
終る 頃一雨の 来し 溝 浚へ  
浮巢あとの 浮巢の 所在 なき こと  
浮巢には 戻らぬ 鳩の子 なり けり  
湖の 水面に 浮れ ある 浮巢  
六月十二日 北信越ホトギス俳句大会前日句会  
万緑や 雪の くらしは 間は はずとも  
露 涼し 杉の 深さに 包まれて  
いにしへを 語る 神社の 蟻地獄  
六月十三日 北信越ホトギス俳句大会  
花文字は 遠く 見るもの 姫女苑  
六月十四日 有恒倶楽部 吟行  
星を見に 来しや 蛭を見に 来しや  
六月十五日 有恒倶楽部  
朝日差し 込むまで 短夜を 熟寝  
朝涼の 山 氣を 胸に 溢れしめ  
星空を 仰ぎ 短夜は じま れり  
まよば 蛭見しは うつつか 山の 朝  
まぼろしに あら ざう つゝの 蛭の 夜  
六月十五日 無名会 出句  
里山の 四葩の 色を 綴る 旅  
六甲の 明る ぎ 空の 濃紫 陽花  
夜は 山の 星と 語りて 四葩 かな  
紫陽花に 山風 荒き 日なり けり  
半分は 色を 残し ぬ七 変化  
紫陽花の 今朝の 色見て 旅立ち ぬ  
書き出しに 迷ふ 稿 債七 変化  
六月十六日 夏潮句会  
茂り来て いよいよ 狭庭と なりし かな  
教は れば すぐ 試したく 草矢 かな  
稽古会 近づく 夏と なり けり

草矢まだ 飛ばさず ああ だか う だ かな  
又 笑ふ 草矢へ なへな 落ちに けり  
ほたる 見の旅の 余韻に ある 家 居  
六月十七日 摩耶山俳句大会  
快晴といふ 梅雨 晴を 携へて  
避暑心とは 忽ち に ありに けり  
夏山路 右折 六甲 左折 摩耶  
六月十九日 句会と 講演の 会  
お隣へ フォエンス 一枚 蛇の 道  
蛇 逃せぬ 蛇の 行方 でありに けり  
蛇見しと 聞けば 所在を 確かめ  
田草取 夕日 傾きを けり  
六月十九日 悼 伊関みぎわ様  
これより はりらの 便りに 偲ぶのみ  
六月二十一日 野分会  
見当らぬ 蠅 所在 なき 蠅捕器  
朝市に 蠅 捕り ボン 吊る されし  
印象は 戦後の わが 家 蠅捕器  
六月二十一日 朝日カルチャー句会  
剩へ 台風も 呼ぶ 梅雨 なりし  
六月二十四日 きざらぎ会  
その 辺に 羽音 来てを り 誘蛾 灯  
二三日 過ぎて ぬし 夏至 旅 帰 灯  
今宵より 崩るる 天気 誘蛾 灯  
梅雨晴の つづく 旅路に 従へり  
六月二十五日 時雨句会  
どこまでも 夏野の 果の なき 如く  
二次会も 約し 夏行の スケジュール  
六月三十日 稽古会 老柳山荘  
露涼しここに 学びし 日の ことを  
梅雨の 齟齬 従ふ ほかは なかり けり  
山荘に 汗の 人数 揃ひ けり  
出水川 越える 四時間 半の 齟齬  
雷雨 駆け 抜けし 裾野に 着きに けり

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成十六年六月二日 一水会

梅雨寒や何時も何処かに注意報

六月二日 蕉心会

尾より出づ三角池の金魚かな

梅雨晴のやうな修学旅行生

三角池金魚は三角関係に

山梔子の花嗅覚を離さざる

句座涼し恙を抜けし人迎へ

六月六日 滋賀県ホトトギス俳句大会

梅雨雲に比叡稜線威を正す

ヨットの帆風を挟んでをりにけり

梅雨雲に一枚の湖対峙せり

六月七日 俊英句会

梅雨雲を抜けて淡海は遠からじ

明易や虚子南無阿弥陀我アーメン

六月十日 土筆会

夏帯に恋の残香ありにけり

水澄 皇帝 円舞 曲奏で

曲線に直線にまひまひの舞ひ

虫眼鏡蟻に見られてをりにけり

六月十三日 北信越大会

里山を守る万緑でありにけり

梅雨雲といふ底辺のありにけり

蟻地獄古刹の歴史淋しめず

人増えてゆく梅雨雲の消えてゆく

六月十五日 草木瓜会合同句会

虚子の世は遠くて近し明易し

実梅落つまでの風向ありにけり

明易し上越新幹線速し

六月十七日 登高会

この岩を結界とせし御祓川

水濁ること拒みたる御祓川

萍や人生は神のみぞ知る

苺摘胃の腑が待つてをりにけり

夫所望母のショートケーキかな

六月十九日 ホトトギス句会

一線の歪むよりくちなはとなる

くちなはの舌が怒つてをりにけり

六月二十二日 若水会

葉表は玉座となりて青蛙

青嵐生きとし生けるもの沈め

水中花赤より主張始めけり

膨れつつふくれつつ水中花かな

六月二十三日 目黒学園句会

梅雨雲の厚きにピルの竦みたる

六月二十三日 三番町句会

単衣着て昨日の財布何処行つた

山荘の籐椅子に虚子偲ぶ旅

六月二十五日 時雨会

頂上といふ明るさに夏野行く

きしきしと夏野の草を踏んでをり

その中に社長も並び夜釣人

巨人ファン阪神ファンも夜釣人

六月二十七日 伝統俳句協会通常総会

冷房に議事の進んでゆきにけり

# 雑詠

## 廣太郎 選

日本間に一隅の生れ寒椿 大阪 塙 告冬  
 夫の会妻の会あり春を待つ 同  
 水温むうつつてをりし旅心 同  
 下萌えてゐるのは時間かもしれず 東京 後藤立夫  
 梅と言ふ通りすがりのやう匂ふ 同  
 はるばると遠きところに舩を挿す 同  
 初富士は白面の青年と見ゆ 明石 中杉隆世  
 紐一本宙に放たれたる独楽よ 同  
 狐火も第九交響曲に和す 同  
 はんなりと気品競はず寒牡丹 東京 吉田小幸  
 暮れなづむ影を重ねて寒牡丹 同  
 寒紅や昨日は楽し今日は憂し 同  
 恋猫の闘ふ雄になり切つて 榎原 稲岡 長  
 恋猫の闇狂ほしく濃かりけり 同  
 木曾を出て須臾のいさをし義仲忌 同  
 河豚雑炊とはおかはりの憚られ 徳島 岩田公次  
 冬桜風に揉まれて消えにけり 同  
 石かかげ罷り出でたる霜柱 同

言ひ遺す間もなく父の逝く師走 金沢 坂井光代  
 弔問に開け放ちたる冬座敷 同  
 ストープに守られて父の通夜を守る 同  
 かまくらといふ一塊の子等の城 明石 涌羅由美  
 泣き顔となり雪だるま解け始む 同  
 あるがまま運命受けとめ蝶凍てぬ 同  
 醉眼にとりつかれたる雪女郎 西宮 本郷桂子  
 しろがねの化身を闇に雪女郎 同  
 雪女闇に吸はれし行方かな 同  
 月冴えて木花之開耶姫現るる 吹田 宮崎 正  
 湖よりの風の止まぬ日月冴ゆる 同  
 野火猛るなかハイウエー突つ走る 同  
 ヴイオロンの音がまゆ玉をくぐりゆく 神戸 山田弘子  
 出張に雪沓出番ありにけり 同  
 一年を託すに軽し戎笹 同  
 寒菊や手入れ届かぬ庭隅に 福岡 松尾緑富  
 発信の刻限の来し日脚伸ぶ 同  
 書屋の灯いまだ灯さず日脚伸ぶ 同  
 高原の町に原色クリスマス 高崎 吉村ひさ志  
 傾くは恥ぢらひに似て寒牡丹 同  
 オリオンも獅子座も凍り街黙す 同  
 犬吠えて吠えてどんだの火勢かな 東京 河野美奇  
 北斗星へとどんだの火昇り初む 同  
 磯宮へ曳いて行きたるどんだの香 同

## 雑詠句評（五月号より）

静龍・美奇・芳子  
憲明・葉・中正  
明倫・青虎・千鶴子  
忠彦・保佳・廣太郎

### 青写真大きな日向ありにけり 大阪 佐土井智津子

昭和二十年代の少年雑誌の幾つかある付録の一つに、晩秋になると決まったように青写真（日光写真）がついていた。今から思うとそれは粗末な厚紙の枠に白黒で動物や乗り物、漫画の主人公などをあしらった原画に、印画紙を重ねて日光に当てて写し取った懐かしい遊び道具であった。枠を入れても十センチ余りの青写真を囲んで子供たちが遊んでいる。写真をセットして出来具合を覗き込んでいると日陰になってしまふし、そうかと言って他の遊びに夢中になると日光に当て過ぎて画面が黒くなり結果の良い写真が出来ない。そのような懐かしい体験を思い起こして居られるのかもしれない。

青写真と言う小さな遊び道具と大きな日向と表現した冬の日照りの大小の比較が面白い句材となり表現されている。（静龍）

筆者が子供の頃にも、「日光写真」と称して少年月刊誌の付録に時々「青写真」が付いていた記憶がある。日にかざして絵柄が浮き出るまでの時間が待ち遠しかったのを覚えている。それも夏ではなく、冬の太陽の光線の具合がぴったりで、そんな寒々とした記憶もこの句から伝わってくる。（廣太郎）

### 一言に全身ゆるめ初笑 東京 橋本くに彦

「笑う門には福来る」の諺通り、いつもにこにこして、笑いに満ちている人の家には自然に福運が回るものである。ことに初笑は一年の福を集めるような縁起を祝うものでもある。

どんな一言であったのか、全身をたちまち緩めるほどの今年初めの笑いの。全身を緩め過ぎて「ははは、あはは」と一人から回りの人へも笑いが伝染してゆく楽しさ。「全身ゆるめ」の措辞に「顔くちやくちやく」「あまりの笑い過ぎに泣き笑い」などまだ、次々と想像出来るのも初笑のためたさがある。（美奇）

新年のためたさが極まったような季節であるが、それに輪をかけたような楽しい句である。誰かが面白い事をおっしゃったのであろう。家族の仄々とした景が見て取れる。（廣太郎）（以下略）

天地有情

心子選

弱法師われの三寒四温かな 京都 粟津松彩子

寒灯の光の翼張りにけり 同

咳ひとつ手術の傷を直撃す 神戸 藤井啓子

ものの芽に生きる勢ひを貰ひけり 同

つくづくとわが句碑ながら冬は寒し 同 後藤比奈夫

これ以上をれば風邪引くかも知れず 同

黒々と明けて白々冬の朝 東京 稲畑廣太郎

冬の朝晴後雨といふ都心 同

花鳥諷詠愉しみ尽し去年今年 龍野 浅井青陽子

訪ひの無きこと嬉し日向ぼこ 同

天地に薄氷張りし夜明かな 豊中 滝 青佳

何もかも分つてをりし懐手 同

冬帽の地震の記憶を冠りけり 神戸 長山あや

白き野の糸くぼのやうな雪間かな 同

遠すぎし的でありけり弓始 京都 安原 葉

雪卸濟むと被災地より電話 同

浅草寺亡者送りも寒の内 東京 今井千鶴子

お昼など一しよにいか春隣 同

倚れと言ふ枯木倚るなど言ふ枯木 神戸 三村純也

善行を積むこともなく河豚を食ふ 同

飛雪また飛雪となりしお元日 姫路 桑田青虎

発掘の人らかたまりかげろへる 同

ぴいぴいと鶉の高鳴き庭にあり 福岡 松尾緑富

こもごもに鶉金柑を啄みに 同

雪落し立直りゆく竹の列 樞原 稲岡 長

雰囲気のとと雛飾られてありし 同

ていねいにていねいに庭焚火かな 神戸 山田弘子

焚火にも庭師の矜持ありにけり 同

三寒やこんなどこより富士見えて 龍ヶ崎 今橋真理子

富士消ゆる四温の雲につつまれて 同

雲去来 青空去来 春を待つ 大阪 塙 告冬

いつしかに雪間つながらゆきにけり 同

稲架低く野をおほひたる津軽かな 徳島 上崎暮潮

みちのくの秋の蚊出でし机辺かな 同

延着を雪の車窓に聞いて旅 八尾 岩垣子鹿

心当り考へてをり春の風邪 同

# 天地有情句評 汀子

寒灯の光の翼張りにけり 京都 粟津松彩子

寒の灯は凍り詰めた空気の中で瞬き、まるで翼を張るように見ている作者。作者粟津松彩子さんはその翼に乗って黄泉国へと旅立って行ってしまった。

咳ひとつ手術の傷を直撃す 神戸 藤井啓子

手術したばかりの身に咳は応える。咳が一つ出ただけで傷を直撃したような痛さに耐えなければならぬ時間となった。

これ以上をれば風邪引くかも知れず 神戸 後藤比奈夫

風邪をひいたかも知れない予感長年生きてきた作者の勘のよくなものが察知する。寒い中で行事に列席しているのかも。

黒々と明けて白々冬の朝 東京 稲畑廣太郎

まだ冬の朝は暗い。早々と起き出してまだ空が黒い印象の中で

何かしているうちに白々と明けてくる。いかにも冬の朝らしい。

花鳥諷詠愉しみ尽し去年今年 龍野 浅井青陽子

豊饒とした作者。ご生活の心情は自然とあるがまま愉しみ尽して新しい年を迎えられた。一貫して花鳥諷詠に委ねた人生。

何もかも分つてをりし懐手 豊中 瀧 青佳

何と言つても長く生きてきた経験から何もかも分つているのである。人生の達人の懐手である。

冬帽の地震の一記憶を冠りけり 神戸 長山あや

この冬の帽子を被つてあの寒い未明の地震を耐え抜いた作者。その後も冬になるとこの帽子を被つてその記憶を辿っている。

雪卸済むと被災地より電話 京都 安原 葉

作者は地震の地に自坊が有り被災された。仕事の京都住まいにあつて気になる被災地のこと。雪卸も済んだという電話に安堵。

お昼など一しよにいかか春隣 東京 今井千鶴子

洒落た存問の一句。このように誘われると誰も断れない。春の気配を身近に感じて出た誘いの言葉が一句になった。(以下略)